

宮の下遺跡

— 5・6次調査 —

春日市文化財調査報告書
第83集

春日市教育委員会

宮の下遺跡

— 5・6次調査 —

福岡県春日市昇町所在遺跡の調査

春日市文化財調査報告書 第83集

2020

春日市教育委員会

宮の下遺跡

—5・6次調査—

福岡県春日市昇町所在遺跡の調査

春日市文化財調査報告書 第83集

2020

春日市教育委員会

序

中国の歴史書である『後漢書』などには『奴国』という当時の日本の有力な国が記されており、西暦57年には、後漢の光武帝が奴国王に『漢倭奴国王』の金印を贈ったとされています。この奴国については、福岡平野一帯であることがほぼ定説になっています。このことを示すように、福岡平野の那珂川と御笠川流域には、多くの弥生時代の遺跡が確認されており、中国、朝鮮半島から伝わった遺物などが発見されることがあります。

本市の中央を南北に延びる春日丘陵は、小谷が入り組むために小丘陵が樹枝状に連なっています。小丘陵上やその周辺には、大小様々な集落や墓地などの弥生時代の遺跡が連続して確認されており、この遺跡の集合体を須玖遺跡群と呼称しています。その規模は南北2km、東西1kmで、福岡平野最大級の弥生時代の遺跡です。しかも当遺跡群では、先に述べた金印を下賜された奴国王よりも数世代前の奴国王の墳墓が発見されたり、他の遺跡に類を見ないような青銅器生産に関連する遺物、遺構が確認されたりしています。このため、須玖遺跡群は「奴国の王都」とも呼ばれています。

今回報告いたします宮の下遺跡は、須玖遺跡群の西の一角にある弥生時代の墳墓を中心とする遺跡です。1次調査では、銅鏡、円形銅製品、鉄剣などを副葬する有力者の甕棺墓が調査されています。残念ながら盗掘のために副葬品の全容は分かりませんが、王に次ぐような人物が埋葬されたのかもしれない。5・6次調査は、5次調査で甕棺墓が1基確認されただけでですが、歴史時代の水路と考えられる溝を複数調査できたため、当地の遺跡の広がりや土地利用について、新しい知見を得ることができました。

貴重な遺跡の発掘調査報告書としましては、不十分さは免れませんが、本書が研究資料として末永く活用され、一般の方々にも活用していただければ幸いに存じます。

なお、最後になりましたが、発掘調査や発掘調査報告書作成に際しまして、御協力、御指導を賜りました方々に心からお礼申し上げます。

令和2年3月31日

春日市教育委員会

教育長 山本直俊

例 言

1. 本書は2006年4月13日から同年5月23日にかけて春日市教育委員会が実施した歯科医院建築に伴う宮の下遺跡5次調査と、2018年4月12日から同年6月15日にかけて春日市教育委員会が実施した住宅建築に伴う宮の下遺跡6次調査の報告書である。
2. 遺構の実測は、5次調査を井上義也、吉田浩之（現中間市教育委員会）が、6次調査を井上、熊楚御堂早和子、野村俊之が行い、製図は田邊千恵、吉村美保が行った。
3. 遺物の図面作成は、井上、織田優子、片多浩美、竹田祐子、製図は織田、片多、竹田が行った。
4. 掲載写真のうち、遺構については井上、(有)空中写真企画が撮影し、遺物は(有)タクト・西村新二氏が担当した。
5. 本書の遺構実測図に用いた方位は座標北に準じ、座標は世界測地系による数値である。
6. 本書の執筆および編集は、熊楚御堂の協力の下、井上が行った。

本文目次

I	はじめに	1
1	調査に至る経過	1
2	調査の組織	1
II	位置と環境	3
III	5次調査の内容	6
1	調査の概要	6
2	遺構	6
(1)	土坑	6
(2)	溝	8
(3)	ピット	10
(4)	甕棺墓	10
3	遺物	11
(1)	土器	11
(2)	石器	13
IV	6次調査の内容	14
1	調査の概要	14
2	遺構	14
(1)	土坑	14
(2)	溝	14
(3)	ピット	17
3	遺物	17
(1)	土器	17
(2)	石器	20
V	まとめ	20

図 版 目 次

5次調査

- 図版 1 (1) 調査区南半
(2) 調査区南半 (北東から)
- 図版 2 (1) 調査区北半
(2) 調査区北半 (西から)
- 図版 3 (1) 1号溝 A - A' 断面土層 (北西から)
(2) 2号溝 B - B' 断面土層 (西から)
(3) 2号溝 C - C' 断面土層 (西から)
- 図版 4 (1) 4号溝 D - D' ヘルト断面土層 (西から)
(2) 5号溝 E - E' ヘルト断面土層 (北西から)
(3) 7号溝 F - F' ヘルト断面土層 (北西から)
- 図版 5 (1) 1号甕棺墓①
(2) 1号甕棺墓② (南から)
(3) 石斧出土状態
- 図版 6 (1) 5次調査出土土器
(2) 1号甕棺
(3) 5次調査出土土器

6次調査

- 図版 7 (1) 調査区北半
(2) 調査区南半
- 図版 8 (1) 1号土坑断面土層 (南西から)
(2) 1号溝 A - A' 断面土層 (南西から)
(3) 1号溝 B - B' 断面土層 (南西から)
- 図版 9 (1) 2号溝 C - C' 断面土層 (南西から)
(2) 2号溝 D - D' 断面土層 (南西から)
(3) 3号溝 E - E' 断面土層 (南から)
- 図版 10 (1) 4・5号溝 F - F' 断面土層 (北西から)
(2) 5号溝 G - G' 断面土層 (南西から)
(3) 4号溝 H - H' 断面土層 (南西から)
- 図版 11 (1) 4・5号溝 I - I' 断面土層 (南西から)
(2) 4・5号溝 J - J' 断面土層 (南西から)

(3) 4・5号溝下層溝(北東から)

図版 12 (1) 6次調査出土土器

(2) 6次調査出土土器

挿 図 目 次

第1図	宮の下遺跡周辺遺跡分布図	4
第2図	宮の下遺跡位置図	5
第3図	宮の下遺跡5次調査遺構配置図	7
第4図	1号土坑実測図	8
第5図	遺構断面土層図	9
第6図	1号甕棺墓実測図	10
第7図	土器実測図	11
第8図	1号甕棺実測図	12
第9図	石器実測図	13
第10図	宮の下遺跡6次調査遺構配置図	15
第11図	1号土坑実測図	16
第12図	溝断面土層図①	17
第13図	溝断面土層図②	18
第14図	溝断面土層図③	19
第15図	土器実測図	20
第16図	石器実測図	20
第17図	宮の下遺跡調査地点位置図	21

I はじめに

1 調査に至る経過

5次調査については、平成14年12月18日に開発に伴う事前調査の依頼書が提出され、同月28日に重機による確認調査を行った。対象地の3か所に試掘溝を設定したところ、南部は地表より30cm、北部では80cm前後で褐灰色砂土を基本とする地山を検出し、複数の溝と考えられる遺構を確認した。後日、埋蔵文化財の保護に関連する協議を行ったが、開発計画が白紙となったために、発掘調査の計画は一旦中断した。

平成18年2月に、歯科医院建築の申請が出され、基礎が埋蔵文化財に影響を与えると判断されたため、対象地409.42㎡のうちの200.5㎡を発掘調査することとなった。発掘調査は、地権者の負担において、平成18年4月13日から5月23日まで行った。

6次調査については、平成29年4月3日に土地売買に伴う事前調査の依頼書が提出された。その時点では、当地は周知の埋蔵文化財包蔵地である宮の下遺跡の隣接地であった。同月13日に重機を使用して試掘調査を行ったところ、現地表面から約30cmの深さで淡灰黄色砂土の地山に達し、土坑または溝を検出した。このため、宮の下遺跡の範囲の追補訂正を行った。なお、試掘調査は、既存の建物がある状態で行ったために十分に試掘溝を設定することができず、建物解体後に再度確認調査を行うこととなった。

対象地が更地になったため、同年10月25日に再度確認調査を実施した。現地表面から35cm前後下で淡灰黄色砂土の地山に達し、土坑やピットを検出した。南側近接地で行われた1・2次調査では、甕棺墓や石棺墓など弥生時代の墓が確認されており、しかも、鏡などの副葬品を伴う首長墓も含まれる。このため、今回の確認調査で検出した土坑は、土壙墓の可能性があると推定された。地権者と春日市教育委員会で埋蔵文化財保護に関する協議の結果、対象地313.37㎡のうちの216.1㎡を緊急発掘調査することになった。発掘調査は、地権者の負担において平成30年4月12日から6月15日まで実施した。

なお、5・6次調査の報告書作成は、令和元年度を中心に行った。

2 調査の組織

春日市教育委員会が発掘調査を実施した平成18・30年度、報告書刊行の最終的な作業を行った令和元年度の体制は次のとおりである。

5次調査（平成18年度）

教育長	山本 直俊
社会教育部長	鬼倉 芳丸
文化財課長	結城 保雄
管理担当	
統括係長	戸渡 隆
主 査	柚木 泰
主 査	塩足 雅弘
文化財担当	
統括係長	丸山 康晴
主 査	中村 昇平
主 査	吉田 佳広
主 査	森井 千賀子
主 任	境 靖紀
主 任	井上 義也（～6月）
嘱 託	吉田 浩之
嘱 託	長谷部 真弓

6次調査（平成30年度）

教育長	山本 直俊
教育部長	神田 芳樹
文化財課長	神崎 由美
整備活用担当	
課長補佐	小林 達朗
主 査	森井 千賀子
主 査	大原 佳瑞重
主 査	飛永 宗俊（7月～）
主 任	佐伯 廣宣（～6月）
嘱 託	矢越 敏治
嘱 託	種生 優美
調査保存担当	
課長補佐	中村 昇平
主 査	吉田 佳広
主 査	井上 義也
主 任	山崎 悠郁子
主 事	熊笹御堂 早和子
嘱 託	川村 博
嘱 託	尾方 禎莉

報告書作成（令和元年度）

教育長	山本 直俊
教育部長	神田 芳樹
文化財課長	神崎 由美
整備活用担当	
統括係長	高田 博之
主 査	森井 千賀子
主 査	大原 佳瑞重
主 査	飛永 宗俊
嘱 託	坂井 和彦
嘱 託	和田 奈緒
調査保存担当	
課長補佐	中村 昇平
主 査	吉田 佳広
主 査	井上 義也
主 任	山崎 悠郁子
主 事	熊笹御堂 早和子
嘱 託	川村 博
嘱 託	種生 優美
嘱 託	尾方 禎莉（～11月）

II 位置と環境

福岡平野は玄界灘に面しており、古代から対外的交易拠点の一角として機能していた。中国の史書に記された「奴国」の推定地であるこの地域では、朝鮮半島から伝来した稲作や青銅器をはじめとした新技術をいち早く受容し、急速に普及していくなど、弥生文化の先進地域として重要な位置を占めていた。

春日市は福岡平野の南東部に位置し、牛頭山系から派生した春日丘陵のほか、宝満山系の御笠川と脊振山系の那珂川によってできた段丘・氾濫原で構成される。本市は宅地開発などがとても多く、これまでに約150の遺跡を確認している。中でも特筆されることは、弥生時代中期から後期に絶え間なく展開する「須玖遺跡群」の存在である。須玖遺跡群は、市域の中央部から北部に延びる春日丘陵及び周辺の低地に営まれた巨大な遺跡群で、その範囲は南北約2km、東西約1kmである。この範囲には集落や墳墓が稠密しており、奴国王墓や当時の高い技術によって営まれた工房などがあることから、奴国の中枢的な集落と考えられる。

当遺跡群で青銅器生産が行われたのは中期以降であり、須玖岡本遺跡坂本地区、須玖カカウタ遺跡、須玖永田A遺跡、須玖黒田遺跡、須玖尾花町遺跡からは鋳型や送風管、埴埴／取瓶などの青銅器生産関連遺物が多数出土している。須玖カカウタ遺跡では、中期前半の竪穴建物跡とその周辺から、国内最古級の青銅器生産関連遺物が多数見つかった。この発見から、遺跡群が朝鮮半島の先端技術をいち早く取り入れ、青銅器生産の先駆的な存在となったと言える。

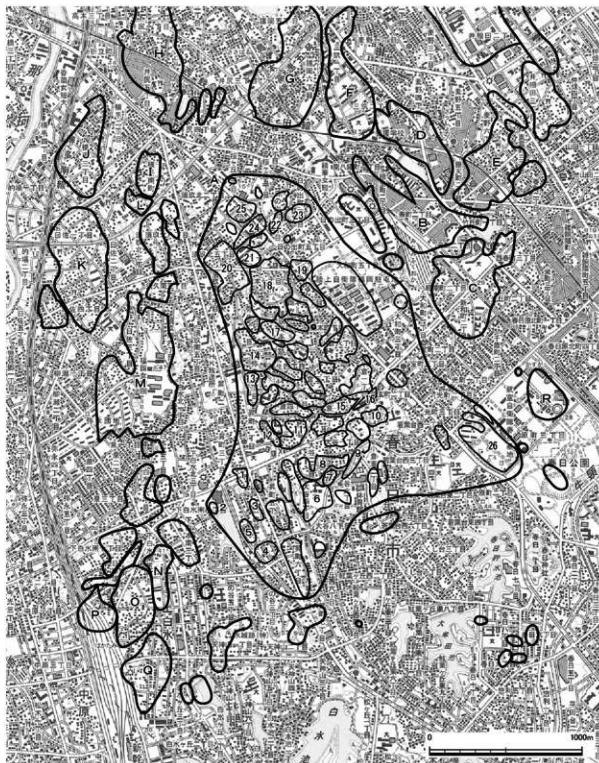
また、青銅器生産の他にガラス玉生産が行われ、須玖岡本遺跡坂本地区、須玖五反田遺跡、赤井手遺跡で勾玉鋳型などが出土している。須玖五反田遺跡では、鋳型のほかにも、未製品やガラス玉を磨いたとされる砥石なども出土することから、生産の過程を追うことができ、当時の先端技術を解明する上で重要な遺跡である。

さらに鉄器生産も行われており、仁王手A遺跡では竪穴建物跡から多量の鉄片が、赤井手遺跡では製作工程を辿ることができる未製品や鉄素材など多くの生産関連遺物が出土する。

このように、須玖遺跡群では生産に関連する遺跡が一際目立つ一方で、須玖遺跡群の西部に位置する赤井手遺跡と竹ヶ本A遺跡、南部に位置する大南A遺跡、高辻D・F遺跡、高辻E遺跡では大溝が確認されており、それらは一帯となり須玖遺跡群を囲む役割を果たしていた可能性がある。

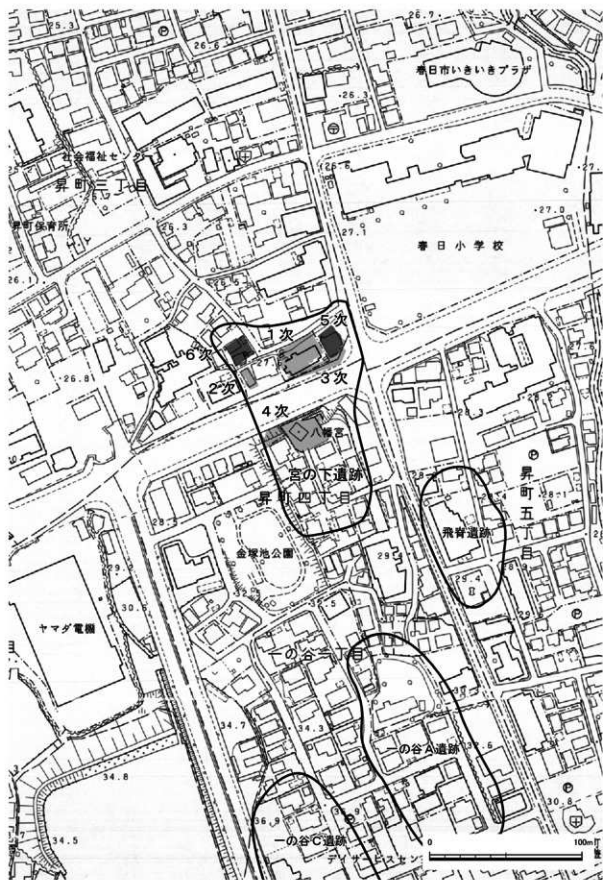
須玖遺跡群は遺跡の規模、遺構、出土遺物ともに卓抜した内容をほこり、「奴国の王都」とも称される他に類を見ない遺跡であろう。

宮の下遺跡は、須玖遺跡群の南西端、諸岡川の左岸に形成された小丘陵の北部に立地する。昭和30年代に建設された道路によって東西に二分される。今回の調査は、道路を挟んだ北部にあたる。過去の調査では、弥生時代中期から終末期まで継続する墳墓群が確認され、舶載鏡片や円形銅製品などの副葬品を持つ首長など、有力者層が埋葬されたことが明らかになった。



- | | | | | | | | |
|-----------|-----------|------------|-------------|------------|------------|-----------|------------|
| 1 宮の下遺跡 | 2 寺田池北遺跡 | 3 一の宮A遺跡 | 4 一の宮B遺跡 | 5 一の宮C遺跡 | 6 大宮遺跡 | 7 高辻宮遺跡 | 8 大南A遺跡 |
| 9 高辻D・F遺跡 | 10 松原遺跡 | 11 大南B遺跡 | 12 江塚山遺跡 | 13 竹ノ木A遺跡 | 14 赤井手遺跡 | 15 仁王手A遺跡 | 16 前左馬遺跡 |
| 17 千石A遺跡 | 18 櫻丸岡本遺跡 | 19 櫻丸北花野遺跡 | 20 櫻丸チカウタ遺跡 | 21 櫻丸岡本B遺跡 | 22 櫻丸永田A遺跡 | 23 櫻丸原田遺跡 | 24 櫻丸玉反田遺跡 |
| 25 櫻丸南郷遺跡 | 26 立石遺跡 | A 櫻丸遺跡群 | B 西八幡遺跡 | C 神岡遺跡 | D 美野日遺跡 | E 美野C遺跡 | F 三馬遺跡 |
| G 熊野遺跡 | H 丹波日遺跡 | I 寺島遺跡 | J 櫻子遺跡 | K 白洗遺跡 | L 笠原遺跡 | M 弥木原遺跡 | N 寺田・長崎遺跡 |
| O 中台A遺跡 | P 門田遺跡 | Q 天神ノ木遺跡 | R 鴨河A遺跡 | | | | |

第1図 宮の下遺跡周辺遺跡分布図 (1/25,000)



第2図 宮の下遺跡位置図 (1/2,500)

Ⅲ 5次調査の内容

1 調査の概要

宮の下遺跡は、春日丘陵北部周辺に展開する須玖遺跡群の一角を占める。春日丘陵は、小谷が入り組み樹枝状をなし、当遺跡は丘陵西部に南北方向に延びる小丘陵の先端付近に立地する。県道により遺跡は南北に分断され、県道南側の4次調査では弥生時代中期の墳墓が確認されたが、副葬品は殆ど出土していない。一方、県道北側の1～3次調査では、後期を主体とする墳墓が調査された。特に1次調査では、首長墓と考えられる後期前半の甕棺墓が確認された。すでに盗掘を受けていたが、銅鏡片、円形銅製品、鉄剣片を副葬する。また、1号石棺墓からはガラス管玉約30個が出土した。この他にも祭祀土坑などが検出される。

5次調査地は1次調査地の東側に位置するため、首長墓を含む墳墓群が広がることが期待された。調査は土置場の都合上、対象地を南北に分けて行った。重機で地表面から南部は約30cm、北部は約80cm下げると褐灰色砂土を基本とする地山を検出した。家屋があったこともあり、調査区西半部は攪乱が目立つが、黒褐色土の覆土からなる溝を中心とする遺構を検出した。

発掘調査の結果、土坑1基、溝7条、甕棺墓1基と少数のピットを確認した。1号土坑は、中央を攪乱されるために性格は不明であるが、弥生時代のもと考えられる。溝は1・2号が弥生時代のものである。特に2号溝は甕棺墓と重複し、墓地との関連性が高い。その他は出土遺物や切り合いから歴史時代の溝と考えられる。中でも大形溝である4・5・7号溝は壁面、底面や土層観察から水路として機能したと考えられる。1号甕棺墓は攪乱を受け、口縁部を中心に欠損するが、大形壺の単棺である。

以上のことから5次調査では、弥生時代の墓地の縁辺部と歴史時代の水田に関連する水路と考えられる溝を検出した。

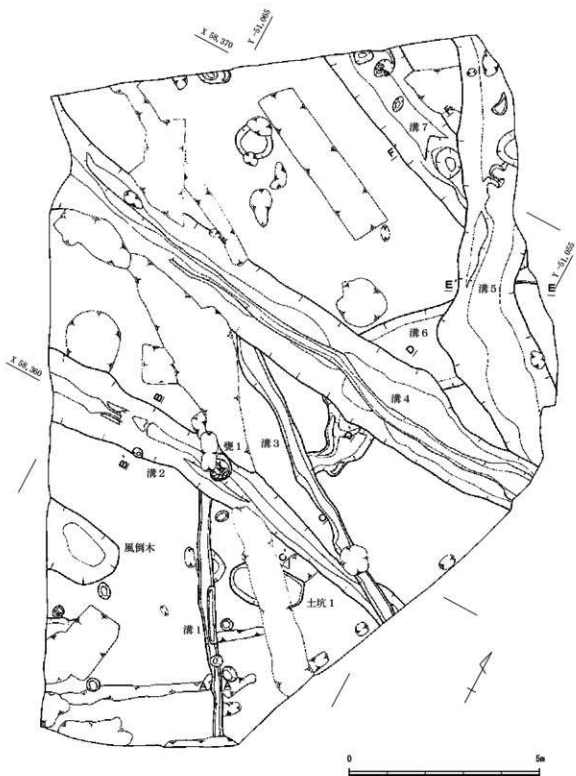
2 遺構

(1) 土坑

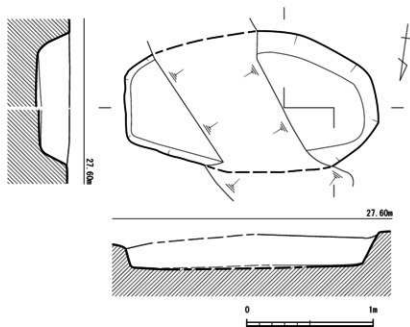
1号土坑 (第4図)

1号土坑は調査区南部にあり、中央を攪乱により破壊される。平面形が1.87×1.4m程度の楕円形に近い土坑であるが、東部は角を持つ。深さは25cm。

出土遺物は、弥生土器片が1点出土する。



第3図 宮の下遺跡5次調査遺構配置図 (1/100)



第4図 1号土坑実測図 (1/30)

(2) 溝

当調査では大小7条の溝を検出した。

1号溝 (図版3-(1)、第3・5図)

1号溝は、調査区南部に約6.5mを検出した。南東から北西方向に延び、幅は20～35cm、深さは15cm前後。中央付近の床面は1段下がる。埋土は地山ブロックを多く含むので埋められた可能性がある。2号溝に切られ、それよりも北側では確認できない。

出土遺物は、少量の弥生土器が出土する。

2号溝 (図版3-(2)・(3)、第3・5図)

2号溝は、調査区中央部やや南寄りで東西方向に約11.5mを検出した。1号甕棺墓に切られる。幅0.5～1.7m、深さ40～60cm程度。西部は広く、断面形が逆台形で深いのに対し、東部は幅が狭く、断面「U」字形で浅い。東部には一段深くなる部分がある。

出土遺物は、図化できる遺物は出土しなかった。

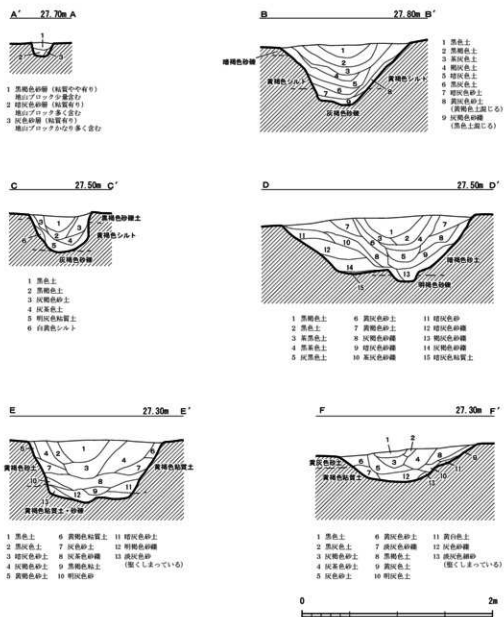
3号溝 (第3図)

3号溝は、調査区の南半部で、南東から北西方向に延びる約8.5mを検出した。2・6号溝より新しく、4号溝よりも古い。幅30～65cm、深さは20cm前後。4号溝よりも北側では確認できない。

遺物は、弥生土器が出土するが、当溝の時期を示すものではない可能性がある。

4号溝 (図版4-(1)、第3・5図)

5次調査で最も新しい溝で、調査区中央部で東西方向に16m程度を検出し、幅は2m前後東部は狭く、西部は広がる可能性がある。西部は擾乱を受ける。3・6・5号溝を切るが、5号溝とは南南隅で接続するため、掘り直しの関係かもしれない。深さは80cm程度で、覆土には砂礫層が多く、床



第5図 遺構断面土層図 (1/40)

が小溝状になることから、水路としての機能が考えられる。また、掘り直しも行われたようである。

遺物は、弥生土器が出土するが、他の溝との切り合い関係から当溝の時期を示す遺物ではないことが分かる。

5号溝 (図版4-(2)、第3・5図)

調査区北部から東部にかけて検出した。南東から北西方向に延び、やや北側に屈曲し、11.5 m程度を検出した。6・7号溝を切り、4号には切られる。幅1.5～2.3 mで、深さは65 cm前後。覆土は下層に砂礫層が多く、床面には水流による溜みが見られるため、水路として機能していたことが分かる。また、掘り直しが行われた可能性がある。4号溝でも記述したように、4・5号溝は水路の掘り直し

や改変の可能性が高い溝と言える。

遺物は、弥生時代から歴史時代の土器や石器が出土する。

6号溝 (第3図)

調査区中央部付近で南西から北東方向に6.5 m程度を検出した。3・4・5号溝に切られ、南西部は細くなり歪な形をする。幅は最大2.2 m、最深部の深さは約60 cm。

遺物は、弥生土器、須恵器や石廬丁が出土する。

7号溝 (図版4-(3)、第3・5図)

7号溝は、調査区北隅付近で南東から北西方向に約6 mを検出し、5号溝に切られる。幅は1.7 m前後、深さは35 cm程度。床面にはピット状の窪みが認められる。

遺物は、弥生土器が出土する。

(3) ピット

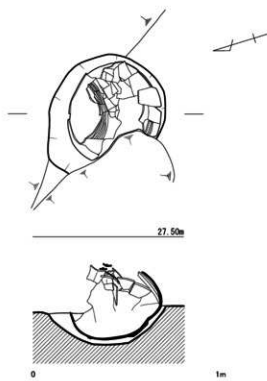
調査区の南部を中心にピットを検出した。直径が40 cm以下のものが殆どで、深さも30 cm以下と深くない。掘立柱建物の柱穴になるような大型のピットはなく、図化できるような遺物の出土がないため時期は不明。

(4) 甕棺墓 (図版5-(1)・(2)、第6図)

1号甕棺墓は、調査区中央南寄りにある2号溝を切る。攪乱を受けており、甕棺の上半部を中心に破壊される。5次調査で、唯一確認できた弥生時代の墳墓であり、今後の調査でもこれより東側では、墳墓は検出されないと推定できる。

墓壙は下半部しか残存せず、現状で0.6 × 0.67 m程度の楕円形を呈する。主軸方向はN・17°・Eにとり、埋置角度は約50°である。やや大形の壺を利用した単棺である。

副葬品や墓壙からの出土遺物はない。



第6図 1号甕棺墓実測図 (1/20)

3 遺物

(1) 土器 (図版6-(1)・(2)、第7・8図)

1号土坑出土土器 (1)

1は弥生土器の甕の口縁部片である。上面はほぼ水平で、内口縁を若干突出させ、外口縁の端部は丸く成形する。

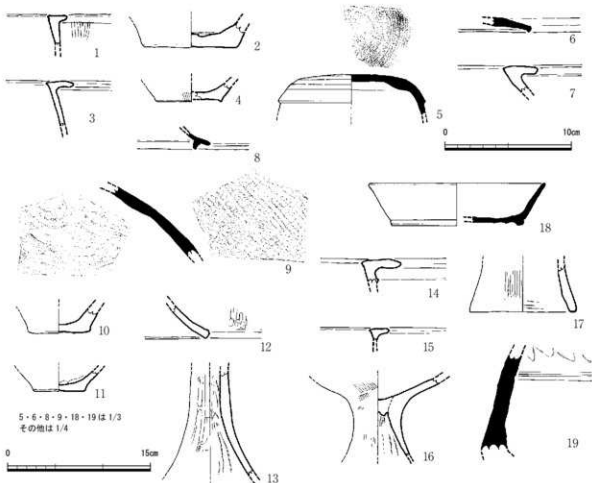
1号溝出土土器 (2)

2は弥生土器の底部で、甕であろう。平底を呈する。

3号溝出土土器 (3)

3は弥生土器の甕の口縁部片である。内口縁をやや突出させ、やや下方に伸びる外口縁の端部はやや尖る。胴部最大径は外口径よりもやや小さいか。

4号溝出土土器 (4)



第7図 土器実測図 (1/3・1/4)

4は弥生土器の底部。やや上底を呈する。

5号溝出土土器（5～7）

5は、口縁部を欠く須恵器の坏蓋。天井部と口縁部の境には稜を持ち、その直径は11.7cm。天井部にはヘラ記号を有する。6は、須恵器の坏蓋の破片資料。口縁部は下方に短く屈曲し、端部は鋭い。

7は弥生土器の甕の口縁部片。内口縁は鋭く突出し、やや下がる外口縁は端部に面を持つ。残存部から復元すれば、口径よりも胴部最大径は大きくなり、やや丸みを持つ器形になると思われる。

6号溝出土土器（8～11）

8は須恵器の坏蓋の口縁部片で、短いかえりが付く資料。9も須恵器で、甕や壺の胴部片。外面はタタキ目、内面には青海波文の当て具痕が残る。やや軟質。10は弥生土器で、底部の中央は窪むが、凸レンズ状を呈する甕の底部であろう。11は弥生土器の底部。平底である。

7号溝出土土器（12・13）

12・13は高坏の脚部。12の脚端部は、下方にやや突出する。調整は外面ヘラミガキで、その他はヨコナデを施す。13は脚柱部で、調整は外面がハケ目後にヘラミガキを施す。内面はしほり痕があり、ナデ調整。

遺構検出時出土土器（14～18）

14～17は弥生土器。14・15は甕の口縁部。14は内口縁をやや突出させ、外口縁は外へやや下がり、端部が若干突出する資料。口縁下には断面三角形の突帯を付す。15は上面が水平で、内・外口縁が若干突出する資料。16は高坏の坏部と脚部の接合部。外面の調整はハケ目で、内面にはしほり痕を有する。17は器台の脚裾部で、裾部径は11.2cm。調整は内外面ともにハケ目を施す。

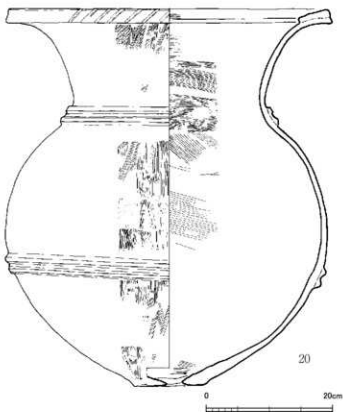
18は、調査区東隅、4・5号溝の検出時に出土した須恵器の坏身。口径14.0cm、高台径10.6cm、器高3.4cm。内外面の殆どはヨコナデを施すが、内底部の中心は不定方向のナデ、外底部はヘラ切後に不定方向のナデを施す。

攪乱出土土器（19）

19は須恵器の甕の頸部で、直下には胴部が接合する。上部には退化した波状文と不鮮明な沈線を2条施す。

1号甕棺墓（20）

やや大形の広口壺で、口径52.0cm、

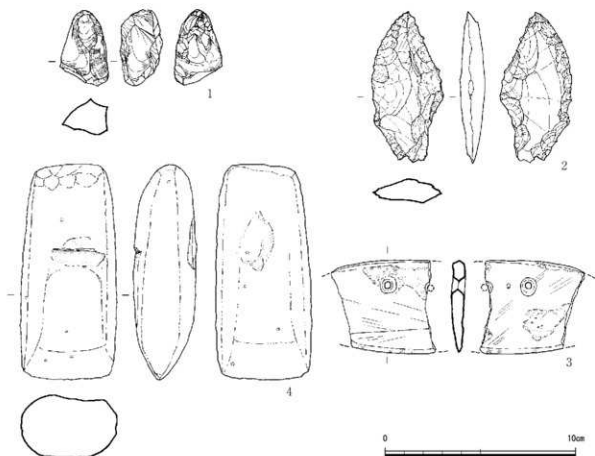


第8図 1号甕棺実測図（1/6）

頸部径 31.0 cm、体部最大径 51.4 cm、底径 11.8 cm、器高 59.8 cm。口縁部内面には粘土帯を貼り付け肥厚させる。端部には板状工具による右上がりの刻目を施す。頸部と体部の境と体部最大径下には、見た目が2条で断面台形を呈する「M」字状の突帯を付す。底部は僅かに凸レンズ状をなし、焼成後に外面からの打撃により穿孔する。調整は内外面ともにハケ目とナデを施す。

(2) 石器 (図版6-3)、第9図)

1は包含層から出土した漆黒色の黒曜石の石核で、風化は見られない。最大長4.0 cm、最大幅2.55 cm、最大厚2.3 cm。下部に自然面を残す。2は5号溝から出土した安山岩製の石器。石槍の可能性を考えたがスクレイパーの可能性もある。最大長8.0 cm、最大幅3.8 cm、最大厚1.3 cm。横長剥片を素材にし、すべての方向から粗い剥離を施す。3は6号溝から出土した角閃石安山岩製の石廬丁で、1/2が残存する資料。直径3 mm程度の孔が2つ確認でき、その真ん中には、途中で孔を穿つのを止めたのであろうか、深さ1 mm弱の窪みがある。4は5号溝から出土した石材不明の中形の両刃石斧。最大長11.4 cm、最大幅5.1 cm、最大厚3.4 cm。柄に装着した痕跡であろうか、両面には窪みがある。



第9図 石器実測図 (1/2)

IV 6次調査の内容

1 調査の概要

6次調査地は、弥生時代後期の墳墓群などを確認した2次調査地の北側に位置する。調査は土置場の都合上、対象地を南北に分けて行った。重機で地表面から30cm前後下げると淡灰黄色砂土を基本とする地山に達した。当地は宅地として利用されていたため、いたる所を攪乱されていたが、黒褐色土の溝を中心とする遺構を検出した。

発掘調査の結果、土坑1基、溝6条と少数のピットを確認した。1号土坑は、大半を歴史時代の4号溝に切られる。遺物の出土がないことや残存度が低いために性格については分からない。

調査区南端で検出した1号溝は水路の可能性があるが、大半は調査区外に延びるため、詳細は不明である。2・3・6号溝は、幅0.4m前後の小形の溝で、2号溝は深さが40cm以上あり、掘り直しが行われた可能性がある。4・5号溝は平行するが、本来あった溝の掘り直しと考えられ、同時併存した可能性がある。壁面、床面や土層観察から水路として機能したことが分かる。これらの溝からは、弥生土器が出土するが、周りの調査から考えると、歴史時代の溝と考えられる。

ピットは調査区の南半部を中心に検出した。何れも小形で浅く、柱痕が確認できる建物跡の柱穴のようなものはない。

2 遺構

(1) 土坑

1号土坑 (図版8-(1)、第11図)

1号土坑は、調査区西部中央にあり、北部は4号溝により削平される。現況の平面形は0.97×6.4m、深さは35cm程度である。

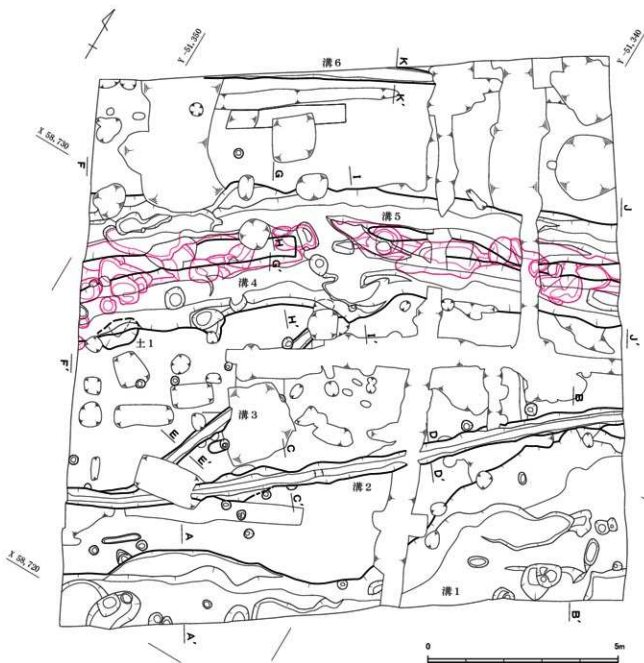
出土遺物はない。

(2) 溝

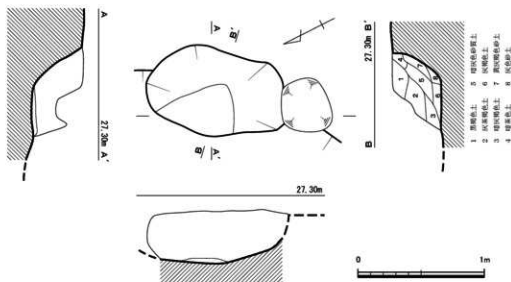
当調査では大小6条の溝を検出した。

1号溝 (図版8-(2)・(3)、第13図)

1号溝は、調査区南壁際で15m程度を検出した。溝の南壁は調査区外であるため、現状の幅は西部は2m以上、東部は4m以上で、調査区の中ほどでやや北側に曲がるようである。東から西へ深さ



第10図 宮の下遺跡6次調査遺構配置図 (1/100)



第11図 1号土坑実測図 (1/30)

を増し、西部の検出面から床面までの深さは70cm。

出土遺物は、少量の須恵器、弥生土器、石器が出土する。

2号溝 (図版9-(1)・(2)、第12図)

2号溝は、調査区南部に14.8mを検出した。幅50cm前後だが中央部やや西寄りには広がる。深さは45cm前後で東側がやや深い。掘り直された可能性がある。

出土遺物は、弥生土器の突帯部が出土するのみである。

3号溝 (図版9-(3)、第12図)

3号溝は、2号溝と3号溝の間に、略南北に延びる約6.5mを検出した。幅35cm前後、深さ13cm程度。攪乱のため断定できないが、2・3号溝と接続する可能性がある。

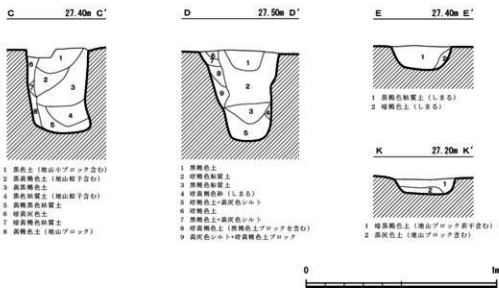
遺物は、図化できるものはない。

4・5号溝 (図版10・11、第13・14図)

4・5号溝は、調査区中央から北側に14m程度を検出した。北東から南西方向に延び、土層の堆積状況や床面の状態などから水路と考えられる。これらの溝は見かけ2つの異なる溝だが、平面的には接続し、重なり合う部分があったり、断面観察でも場所によって新旧が逆転したりするため、同時に存在した可能性があり、水の流れるも両者の間をまたいで流れた可能性がある。また、両者の間には土手状の土層が存在するために、4・5号溝は本来あった別の溝が埋まったものを掘り直して作られた新しい溝と考えられる。

まずは両者の規模をそれぞれ記す。4号溝は幅1.5m前後で、中央部付近は膨らむ。深さは45cm前後。5号溝は幅1.0～1.8mで、深さ45cm程度。両溝の規模に差はない。4・5号溝下部の溝幅は、両者を合わせた幅と完全に一致するかは分からないが、あえて示せば2.6～3.9mで西側が広い。深さは4・5号溝よりもやや浅いが、床面の凹凸が激しく、場所によっては床面よりも20～30cm窪む。

両者ともに、図化できる遺物は出土していない。



第12図 溝断面土層図① (1/20)

6号溝 (第12図)

調査区北壁際に6m程度を検出した。幅40cm、深さ15cm程度で浅い。

遺物は、図化できるものは出土していない。

(3) ビット

調査区の南部を中心にビットを検出した。直径が30cm以下の小型で、掘立柱建物の柱穴になるようなビットはない。

図化できるような遺物の出土はない。

3 遺物

(1) 土器 (図版12-(1)、第15図)

1号溝出土土器 (1~5)

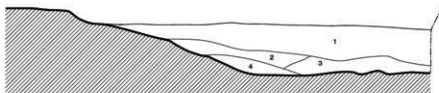
1は須恵器胴部の小片。外面はタタキ目、内面は青海波文の当具痕。やや軟質で、色調は茶灰色。器壁が5mm程度なので、壺などであろうか。

2~5は弥生土器。2・3は丹塗土器で、口唇状の突帯を有す。甕と思われ、2は口縁下、3は胴部最大径下の破片資料であろう。外面には、横位のヘラミガキを施す。4は平底を呈する底部。器壁が薄い。壺と考えられる。5は高坏の脚部。調整は、磨滅のため外面は不明、内面はしほり痕を有す。

2号溝出土土器 (6)

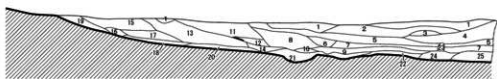
6は弥生土器の突帯部。見かけ断面台形の突帯が2条並ぶが、間がつながるので、「M」字状を呈する。中形甕か壺の胴部突帯か。

A 27.40m A'



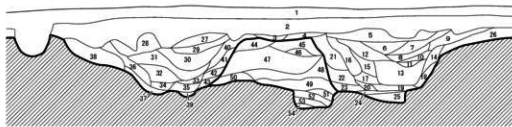
- 1 黒褐色粘質土 (木質少量含む) 3 灰褐色粘質土 (黒色粘土ブロック少量含む)
2 明褐色粘質土 4 赤褐色砂質土

B 27.50m B'



- 1 灰褐色土 (灰白色砂土を含む) 10 明褐色土 (灰白色砂土を含む) 19 灰黄色土
2 暗灰色土 (粘干土層を含む) 11 暗褐色土 20 黄褐色砂土 (礫山ブロックや中を含む)
3 赤灰色土 12 黄褐色土 (上部含む) 21 黄褐色粘砂 (礫山ブロック・黒色土ブロックを含む)
4 灰褐色土 13 灰褐色粘質土 (礫山ブロック多く含む) 22 黄褐色砂土 (礫山ブロックを含む)
5 黒褐色粘質土 14 黒灰色土 23 灰褐色粘砂
6 暗褐色粘質土 15 赤褐色土 24 暗灰色砂土 (礫山ブロック若干を含む)
7 黄褐色土 16 暗灰色土 25 黄褐色砂土 (礫山ブロックを含む)
8 赤褐色土 (礫山ブロック若干を含む) 17 暗褐色砂土 18 黄褐色砂土 (礫山ブロックや中を含む)

F 27.80m F'

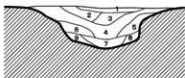


- 1 黄土 19 褐色粘質土 37 明褐色粘質土 (黄灰色シルトブロックを含む)
2 褐色粘質土 (しまる) 20 黄褐色粘質土 38 褐色粘質土
3 暗褐色粘質土 21 黄褐色粘質土 39 黄褐色砂質土
4 暗褐色粘質土 22 灰黄褐色粘質土 (しまる) 40 褐色粘質土 (しまる)
5 黄褐色土 23 灰黄褐色砂質土 (しまる) 41 暗褐色粘質土・暗黄褐色シルト
6 暗褐色粘質土 24 灰褐色粘質土 42 黄褐色粘質土
7 黒灰色土 25 灰黄色砂質土 (灰黄色シルトブロック含む・しまる) 43 黄褐色砂土 (しまる→礫山)
8 暗褐色粘質土 26 暗褐色土 44 暗黄褐色粘質土
9 褐色粘質土 (灰黄色シルト少量含む) 27 黄褐色粘質土 (しまる) 45 黄褐色砂質土 (しまる)
10 暗褐色土 28 暗褐色粘質土 (しまる) 46 黄褐色砂土 (しまる)
11 暗褐色土 29 暗褐色粘質土 (しまる) 47 暗黄褐色砂質土 (しまる・わずかに細粒鉄礦あり)
12 暗褐色粘質土 30 暗褐色土 48 明暗褐色粘質土 (しまる)
13 暗褐色粘質土 31 暗褐色粘質土 49 明褐色粘質土 (しまる)
14 暗褐色粘質土 32 褐色粘質土 50 黄褐色粘質土 (しまる)
15 褐色粘質土 (灰黄色シルト少量含む) 33 褐色砂質土 51 灰褐色砂土 (黄灰色シルト小ブロックを含む)
16 灰黄褐色粘質土 (灰黄色シルトを含む) 34 褐色粘質土 (しまる) 52 灰褐色砂土 (黄灰色シルトブロック少量含む)
17 暗褐色粘質土 (黒色土ブロックを含む) 35 褐色粘質土 (黄灰色シルトブロックを含む) 53 灰褐色砂質土 (黄灰色シルトブロック少量含む・しまる)
18 暗褐色粘質土 (灰黄色シルトブロックを含む) 36 褐色粘質土 54 明暗褐色粘砂 (しまる)



第13図 溝断面土層図② (1/40)

G 27.30m G'



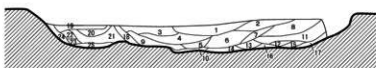
- 1 赤褐色粘質土
- 2 暗褐色粘質土
- 3 暗褐色粘質土 (堆山ブロック少量含む)
- 4 暗褐色粘質土
- 5 暗褐色粘質土
- 6 褐色粘質土
- 7 暗褐色粘質土
- 8 暗褐色粘質土
- 9 褐色粘質土 (しまる)

H 27.40m H'



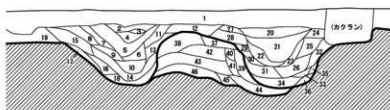
- 1 赤褐色粘質土
- 2 暗褐色粘質土
- 3 暗褐色粘質土
- 4 暗褐色粘質土
- 5 暗褐色粘質土
- 6 褐色粘質土
- 7 暗褐色粘質土
- 8 暗褐色粘質土
- 9 暗褐色粘質土
- 10 暗褐色粘質土
- 11 暗褐色粘質土
- 12 暗褐色粘質土
- 13 暗褐色粘質土 (しまる)
- 14 暗褐色粘質土 (しまる)
- 15 暗褐色粘質土
- 16 褐色粘質土
- 17 暗褐色粘質土 (堆山ブロック若干含む)
- 18 暗褐色粘質土 (堆山ブロック若干含む)
- 19 褐色粘質土
- 20 褐色粘質土 (しまる)
- 21 暗褐色粘質土
- 22 褐色粘質土
- 23 褐色粘質土
- 24 褐色粘質土
- 25 褐色粘質土 (堆山ブロック)

I 27.40m I'



- 1 暗褐色土
- 2 暗褐色土
- 3 暗褐色土
- 4 暗褐色粘質土
- 5 暗褐色粘質土
- 6 褐色粘質土
- 7 暗褐色粘質土
- 8 暗褐色粘質土
- 9 暗褐色粘質土
- 10 暗褐色粘質土 (堆山ブロック)
- 11 暗褐色土
- 12 暗褐色粘質土
- 13 暗褐色粘質土 (堆山ブロック若干含む)
- 14 褐色粘質土
- 15 褐色粘質土
- 16 暗褐色粘質土 (堆山ブロック)
- 17 暗褐色粘質土
- 18 暗褐色粘質土
- 19 暗褐色粘質土
- 20 暗褐色粘質土
- 21 暗褐色粘質土
- 22 暗褐色粘質土
- 23 暗褐色粘質土
- 24 暗褐色粘質土
- 25 暗褐色粘質土

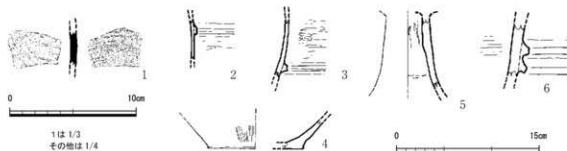
J 27.80m J'



- 1 暗褐色土 (粘土)
- 2 暗褐色土
- 3 暗褐色土
- 4 暗褐色土
- 5 暗褐色土
- 6 暗褐色土
- 7 暗褐色土
- 8 暗褐色土
- 9 暗褐色土
- 10 暗褐色粘質土
- 11 褐色土
- 12 暗褐色粘質土
- 13 暗褐色粘質土
- 14 褐色粘質土
- 15 暗褐色粘質土
- 16 暗褐色粘質土
- 17 暗褐色粘質土 (しまり強い)
- 18 暗褐色粘質土 (しまり強い)
- 19 暗褐色粘質土
- 20 暗褐色粘質土
- 21 暗褐色粘質土
- 22 暗褐色粘質土
- 23 暗褐色粘質土
- 24 暗褐色粘質土
- 25 暗褐色粘質土
- 26 暗褐色粘質土
- 27 暗褐色粘質土
- 28 暗褐色粘質土
- 29 暗褐色粘質土
- 30 暗褐色粘質土
- 31 暗褐色粘質土
- 32 暗褐色粘質土 (堆山ブロック若干含む)
- 33 暗褐色粘質土
- 34 暗褐色粘質土
- 35 暗褐色粘質土 (堆山ブロック多(含む))
- 36 暗褐色粘質土 (堆山ブロック若干含む)
- 37 暗褐色粘質土
- 38 暗褐色粘質土
- 39 暗褐色粘質土
- 40 暗褐色粘質土
- 41 暗褐色粘質土
- 42 暗褐色粘質土
- 43 暗褐色粘質土
- 44 暗褐色粘質土 (しまり強い)
- 45 暗褐色粘質土 (しまり強い)
- 46 暗褐色粘質土 (しまる)



第14図 溝断面土層図③ (1/40)



第15図 土器実測図(1/3・1/4)



第16図 石器実測図(1/2)

(2) 石器(図版12-(2)、第16図)

1は、1号溝から出土した安山岩製の縦長剥片で、混入品と考えられる。最大長4.7cm、最大幅3.55cm、厚さ0.95cm。打面はあるが主要剥離面にはバルバスカーは認められない。表面の一部に自然面を残す。

V まとめ

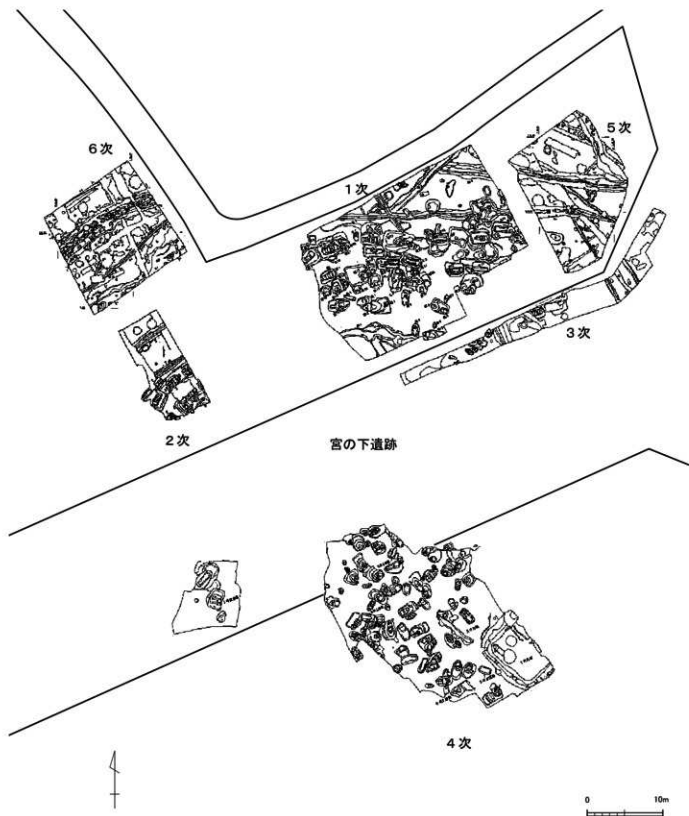
宮の下遺跡は、丘陵北側裾部で行われた昭和63年度の1次調査、平成4年度の2次調査において、調査区の南部に弥生時代中・後期を主体とする墓地を確認した。そこには甕棺墓、土壙墓、石蓋土壙墓、石棺墓等の墳墓群と丹塗土器などが包含された祭祀土坑や溝があった。

特に、1次調査15号甕棺墓は盗掘を受けていたが、銅鏡片、円形銅製品5点、鉄剣片が出土する後期前半の首長墓である。また、終末期の可能性のある1号石棺墓からは、ガラス管玉30個が出土し、この他にも鉄器やガラス勾玉片を副葬する墳墓がある。

一方、両調査ともに調査区の北部は歴史時代と考えられる溝が主体で、北側には弥生時代の墓地は広がらない可能性があった。

今回報告した5次調査地は、1次調査地の東に接する。このため弥生時代の墓地が延びるかが調査前の課題であった。1号溝と2号溝が弥生時代の溝と考えられ、2号溝から北側は弥生時代の遺構はない。また、2号溝の埋没後に1号甕棺墓が造られる。さらに位置関係から判断すれば、1次調査で墓域の区画を示す可能性があると考えられる2号溝と、5次調査の2号溝は同一である。これらのことから判断すれば、5次調査1号甕棺墓が墓域の端になるため、これより北側と東側には墓域は広がらないことが分かる。首長墓である1次調査15号甕棺墓や、未調査である1次調査地と2次調査地の間が、墓地の中心と言える。

1号甕棺墓は大形壺の単棺である。底部には外からの打撃による穿孔が見られる。口縁部の形態や



第17図 宮の下遺跡調査地点位置図 (1/500)

体部の突帯が最大径よりも下にあることから、後期後半～終末の時期が考えられる。器形や突帯から判断すれば、糸島平野と関連があるのではないだろうか。

5次調査の北部で検出した3～7号溝は歴史時代の溝であるが、4・5・7号溝は水路として機能していた可能性がある。なお、4号溝に関しては1次調査の5号溝と同一であることが、位置関係や規模から分かった。

6次調査地に関しては、南側で2次調査地と接するが、現在の水路を挟み一段低い地形をなす。なお、6次調査地の確認調査時には、溝を土坑と誤認したために土壙墓の可能性を考え、弥生時代の墳墓が広がることを想定したが、発掘調査では弥生時代の遺構と断定できる遺構は検出できなかった。これらのことから、2次調査の2号溝から北側には弥生時代の墓域は広がらないことが分かる。

土坑やピットを検出したが、1号土坑は4号溝に大半を破壊されるために、性格や時期などは分からない。ピットに関しては小さなものや浅いものが殆どで、建物の柱穴になるようなものはない。

溝は6条を検出した。殆ど土器が出土せず、しかも混入品と考えられる弥生土器片が主体であった。周りの状況や覆土の色調や質感から考えても、溝は歴史時代に掘られたものと推察できる。特にすでに述べたように、4号溝と5号溝はもともとあった溝を掘り直して造られた可能性があり、平面や土層からは併存していたと考えられる。なお、これらの溝が5次調査の溝と関連するものかは、現時点では分からない。当地の北側や西側には谷が広がっており、未発見の水田が存在する可能性がある。今回検出した溝は、それら水田に関連する水路の役割を果たしていたのではなかろうか。

以上のように、宮の下遺跡5・6次調査について述べてきた。弥生時代には墳墓として、歴史時代には水田との関連が推察される溝が掘られており、住居跡や建物跡は確認できなかった。当地は春日丘陵の裾部にあたり、集落のような生活の場ではなく、墓地として活用されたことが今回の調査によって明らかになった。

圖 版

5 次 調 査



(1) 調査区南半



(2) 調査区南半 (北東から)



(1) 調査区北半



(2) 調査区北半 (西から)

(1) 1号溝A—A'断面土層 (北西から)



(2) 2号溝B—B'断面土層 (西から)



(3) 2号溝C—C'断面土層 (西から)





(1) 4号溝D-D'ベルト断面土層 (西から)

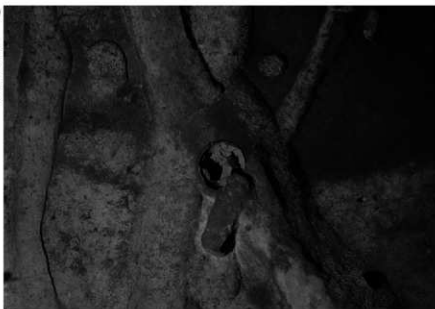


(2) 5号溝E-E'ベルト断面土層 (北西から)



(3) 7号溝F-F'断面土層 (北西から)

(1)
1号壙棺墓①

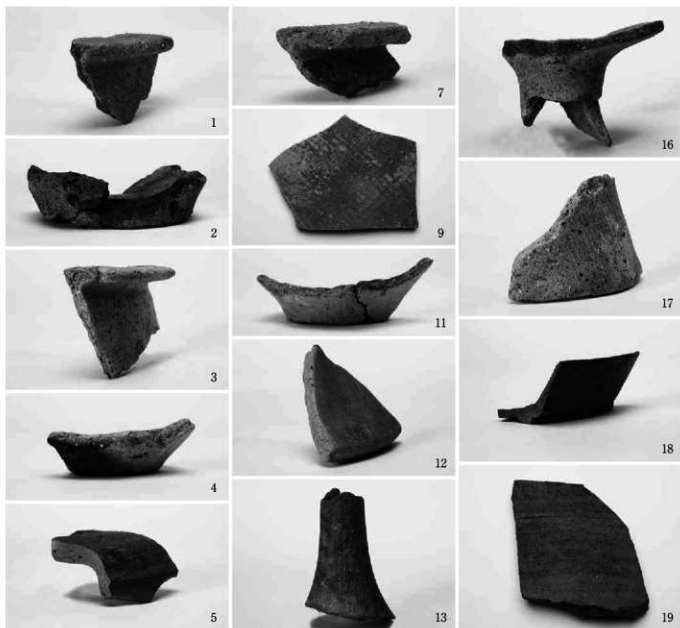


(2)
1号壙棺墓② (南から)



(3)
石斧出土状態

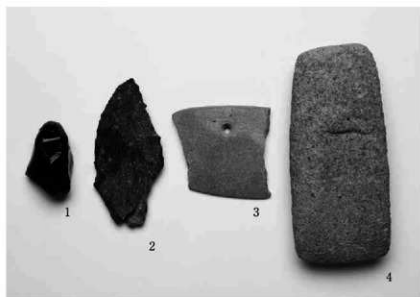




(1) 5次調査出土石器



(2) 1号壺棺



(3) 5次調査出土石器

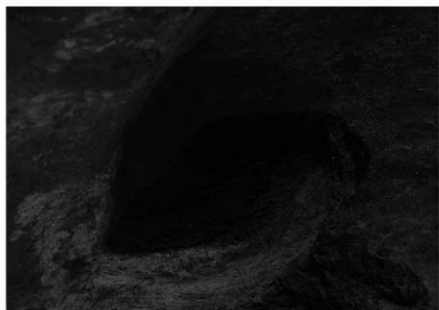
6 次 調 査



(1) 調査区北半



(2) 調査区南半



(1) 1号土坑断面土層 (南西から)



(2) 1号溝 A-A'断面土層 (南西から)



(3) 1号溝 B-B' 断面土層 (南西から)

(1) 2号溝C-C'断面土層 (南西から)



(2) 2号溝D-D'断面土層 (南西から)



(3) 3号溝E-E'断面土層 (南から)

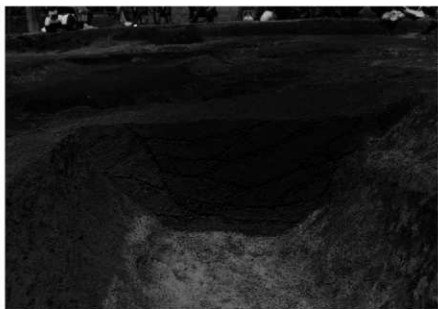




(1)
4・5号溝 F-F'断面土層 (北西から)



(2)
5号溝 G-G'断面土層 (南西から)



(3)
4号溝 H-H'断面土層 (南西から)

(1) 4・5号溝1-1'断面土層 (南西から)

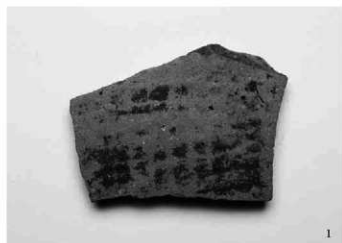


(2) 4・5号溝J-J'断面土層 (南西から)



(3) 4・5号溝下層溝 (北東から)





(1) 6次調査出土土器



(2) 6次調査出土土器

報告書抄録

ふりがな	みやのしたいせき ご・ろくじちょうさ							
書名	宮の下遺跡 - 5・6次調査-							
副書名	福岡県春日市昇町所在遺跡の調査							
シリーズ名	春日市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第83集							
編著者名	井上義也・熊埜御堂早和子							
編集機関	春日市教育委員会							
所在地	〒816-0804 福岡県春日市原町3丁目1番地5 TEL 092-584-1111							
発行年月日	2020年3月31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 m ²	発掘原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
みやのしたいせき 宮の下遺跡 5次調査	ふくおかけんかすがしのぼりまち 福岡県春日市昇町	40218		33° 31' 42"	130° 26' 52"	20060413 \	200.5	記録保存調査
みやのしたいせき 宮の下遺跡 6次調査	ふくおかけんかすがしのぼりまち 福岡県春日市昇町	40218		33° 31' 41"	130° 26' 49"	20180412 \	216.1	記録保存調査
20060523						20180615		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
みやのしたいせき 宮の下遺跡 5次調査	墓地	弥生時代 歴史時代	土坑 溝	1基 7条	弥生土器 須恵器 石器	弥生時代の溝と歴史時代の溝を検出。		
みやのしたいせき 宮の下遺跡 6次調査	墓地	歴史時代	土坑 溝	1基 6条	弥生土器 須恵器 石器	歴史時代の溝を検出。特に4号溝と5号溝はもともとあった溝を掘り直して作られた可能性がある。		
要約	<p>宮の下遺跡は、須玖遺跡群の南西端、諸岡川の左岸に形成された小丘陵の北部に立地している。1・2次調査では豊棺墓、土壇墓、石蓋土壇墓、石棺墓の墳墓群や丹塗り土器を含む祭祀土坑が見つかったことで、墓地を中心とした遺跡であることがわかった。また、調査区の北部で歴史時代の溝が検出されたことにより、北側に墓地が広がらない可能性があった。</p> <p>1次調査地の東に位置する5次調査地では、弥生時代と歴史時代の溝を確認したが、弥生時代の溝である2号溝から北側では弥生時代の遺構を確認できなかった。2次調査地の北に位置する6次調査地では、歴史時代の溝を検出したが、弥生時代の遺構を検出することはできなかった。このことから、2次調査地の2号溝から北側に墓地が広がらないことが確認された。</p> <p>今回の調査によって当地では、弥生時代には墳墓が、歴史時代には水田との関連を想定できる溝が造られたことがわかり、土地の利用を考えていくうえでも貴重な成果となった。</p>							

宮の下遺跡

— 5・6次調査 —

春日市文化財調査報告書 第83集

令和2年3月31日

発行 春日市教育委員会
福岡県春日市原町3丁目1番地5

印刷 株式会社 西日本新聞印刷
福岡県福岡市博多区吉塚 8丁目2番15
